

講演概要

既成概念を揺さぶる創造力 ～「問題」が問題でなくなる地平～

山内泰（NPO 法人ドネルモ代表理事）

本講演では、「社会モデル」に基づく課題の捉え直しと、文化芸術的手法を通じた新たな視座の創出を主題とした。「(障害の) 社会モデル」の考え方を敷衍・展開し、社会通念上「問題」とされる事柄が問題でなくなる地平を展望するものである。

「(障害の) 社会モデル」とは、障害を「個人の欠陥」とする従来の医学モデルに代わり、「社会や環境が障害を作り出している」と捉える立場である。この考え方は2006年に国連で採択された障害者権利条約において示され、日本でも2011年の障害者基本法改正により公式に採用されている。

この考え方の意義を、講演者は、問題を個人の責任に還元せず、社会構造や規範そのものに問題の根源を見出す点に見出している。その点で、社会モデルは制度や設備といったハード面にとどまらず、「普通」や「正常」とされる社会規範そのものを問い直すソフト面にこそ本質がある。これはミランダ・フリッカーの「認識的不正義」や、日本におけるジェンダーギャップの実態と結びつく話であり、社会の「普通」がマジョリティの都合に最適化されている構造の問題に関わっている。

その上で、こうした既存の構造を揺さぶる手法として、文化芸術（アート）の力を紹介した。西洋絵画の印象派やバートーヴェン後期作品に象徴されるように、当時の常識や美的規範を逸脱しながらも新たな価値を切り開いた表現は、社会規範の変容を可能にする創造的営為と捉えられる。障害者による当事者運動もまた、健常者像への適応を拒み、自らの存在を「世に問う」主体としての在り方を提示する点で、この創造的アプローチと通底している。

さらに、社会モデル的アプローチの具体例として、大牟田市での「安心して徘徊できるまち」の実践を紹介した。当初は「問題行動」とされていた行為が、地域住民との対話によって「記憶に根ざした馴染みの道を歩く行為」へと再解釈され、「問題」が問題でなくなる地平へと転換されていく具体例である。加えて、村瀬氏による「老いを問題化しない介護」、認知症当事者と介護者が共に創るアートワークショップなど、多様な実践例を紹介した。いずれも、個人を変えるのではなく、社会の側が変わることによって「問題化」そのものを解体しようとする試みである。

社会モデルに基づく「問題」が問題でなくなる地平が、社会的（文化的）処方の実践においても、豊かな示唆を生むことを期待したい。